

## 福岡方言における動詞・形容詞と疑問詞疑問文のアクセントに関する覚え書き

久保, 智之  
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 言語学

<https://doi.org/10.15017/26252>

---

出版情報 : 文學研究. 107, pp.157-183, 2010-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 福岡方言における動詞・形容詞と疑問詞 疑問文のアクセントに関する覚え書き

久保智之

## 要旨

福岡方言では、動詞・形容詞や疑問詞疑問文のアクセントは、統語構造が組み上がったあとに付与されると考えられる。これらのアクセントは、後ろから3番目のモーラに下がり目を置く規則、いわゆる -3 規則と、その付帯規則を仮定することで説明できる。窪菌 (2006) や Kubozono (2006) では、東京方言で、この -3 規則 (ないしラテン語規則) が、外来語だけでなく、複合語や動詞・形容詞にも広く当てはまることが主張されている。福岡方言では、少なくとも動詞・形容詞と疑問詞疑問文のアクセントに関しては、ほぼ同じ規則が当てはまる。

キーワード：福岡方言、動詞・形容詞、疑問詞疑問文、-3 規則

## 1. 問題の所在

### 1.1. はじめに

早田 (1985: 29-31) が指摘するとおり、福岡方言の固有語の名詞のアクセント体系は、下がり目 (以下 1 で示す) の位置の対立があるという点で、東京方言に似る。固有語の名詞は、下がり目の位置を心的辞書に指定しておく必要がある。

本稿では、これとは違って、「アクセントが自動的に付与される」と考えられる場合を見る。まず下の(1)を見よう。動詞や形容詞は、語幹と語尾から成っており、「単語全体が心的辞書に入っていて、そのアクセントが指定されてい

る」とは考えられない。また、例えば東京方言の動詞や形容詞は、有アクセントか無アクセントかの2型の対立を持つが、福岡方言ではこの対立がない。1型アクセントである。しかし活用形によって音声的な下がり目の位置が異なる。これらについて、従来とは異なる一般化を示す。なお、以下のデータは、すべて久保（1957年、福岡市城南区生まれの生え抜き）の内省による。福岡方言のデータはすべてカタカナで示す。下がり目を1で示す。ピッチの実現は、東京方言と大略同じである（1までピッチが高い）。必要に応じて、大略対応する共通語訳を〈 〉内に示す。

- (1) a. タベ1タ (動詞)  
 b. タベ1タラ (動詞)  
 c. アカカッ1タ (形容詞)

次に下の(2)を見よう。(2)(a)のような疑問詞疑問文は、早田（1985）、久保（1989など）、Kubo（2005）で記述されているとおり、疑問詞から文末までが1つのアクセント句となり、下がり目がない。疑問詞から文末まで平らな音調が広がり、本来あるアクセントの対立（名詞の場合）も中和する。(2)(b)も疑問詞疑問文で、同じように平らな音調が広がるが、「カイナ」など、音形をもつ補文化辞が文末にあって、下がり目がある。(2)(c)は、疑問詞疑問文が埋め込まれた場合で、補文化辞（以下Qで表わすことがある）「カ」の直前に下がり目がある。これらも、もちろん、心的辞書に音形が指定されているはずもない。しかし、(a)(b)(c)のように、下がり目がない場合と有る場合があり、また有る場合でも、下がり目の位置が異なる。これらについて一般化を試みる。

- (2) a. (ダレガ フコーカニ キタ) ↑  
 ( ):アクセント句の境界、↑:上昇調  
 cf. (ダレ1カ) (フコ1ーカニ) (キ1タ) ↑  
 b. (ダレガ フコーカニ キタト1ヤラ)

〈誰が福岡に来たのやら〉

c. (ダレガ フコーカニ キタ<sub>1</sub>カ) (ワカラ<sub>1</sub>ン)

以上見てきた(1)(2)の現象は、ともにアクセントが心的辞書では指定されていない、と考えられる点で共通している。共通しているとすれば、一般化ができるはずであろう。それを試みた。まだ考えが固まっていない点も多い（特に4節）が、関連すると思われる現象をなるべく多く挙げるように努めた。

## 1.2. 解決の方向性

ここで、東京方言に関する窪菌（2006: 22-28）の主張を要約する。外来語や複合語のアクセントは、同じ規則によって付与される。下の(3)「-3 規則」がそれである。

(3) -3 規則：後ろから3番目のモーラを含む音節にアクセントを付与せよ。

この規則に、「後ろから3番目のモーラより語末よりに形態素境界があれば、そこにアクセントを付与せよ」という規則を合わせれば（この文は、久保の創作である<sup>1)</sup>、下の(4)のような動詞・形容詞の活用形のアクセントも、(5)のような複合語のアクセントも、説明できると言う<sup>2)</sup>。

- (4) a. はし<sub>1</sub>-る  
b. しらべ<sub>1</sub>-る  
c. うつくし<sub>1</sub>-い

- (5) a. ちのみ<sub>1</sub>-ご  
b. くわがた<sub>1</sub>-むし  
c. のね<sub>1</sub>ずみ

以上が窪菌の主張である（実際には窪菌は、制約ベースで考えているであろう）。McCawley (1968) 以来、外来語は -3 規則、動詞・形容詞は -2 規則でアクセントが付与され、また別に複合語アクセント規則があると考えられて来た。これらが1つの規則(3)によって付与されると分析できれば、より一般化が進む。ただし、「たべ-よ1ー」「たべ-た1い」のように「形態素境界の後ろに重音節がある場合には、そこに付与せよ」という但し書きも必要である。それでも、「た1べ-た」と「たべ1-る」の違いを説明するには、これらの形態素を参照する指定が必要となるように思われる。また、有アクセントと無アクセントの違いが、どう -3 規則と関わるのか、という問題もある。

福岡方言でも、同じような一般化が可能である。動詞・形容詞など活用形のアクセントについては、有アクセントと無アクセントの違いがある2型の東京方言より、うまく行く。いや、当然うまく行くはずである。以下、動詞・形容詞、疑問詞疑問文の順に、アクセント付与を見ていく。

なお、福岡方言における外来語と複合語のアクセントについても考察すべきであるが、これらの中には、「-いろ〈色〉」([+ 0アクセント]と指定)など、個別にアクセントが指定されていると考えるべきものも多い。よって、今回の直接の考察対象からは除くことにする（4節の議論で、疑問詞疑問文のアクセントについて、複合語形成として分析する案を提示している）。

## 2. 動詞・形容詞のアクセント

ここでは、福岡方言の動詞・形容詞のアクセントが、比較的単純な規則によって自動的に付与されていることを示す。

### 2.1. 動詞のアクセント

#### 2.1.1. 概観と早田（1985）の分析

福岡方言の動詞のアクセントは、東京方言と大きく異なり、全ての活用形に亘って対立がない。下の(6)と(7)で、東京方言と違って、福岡方言のアクセント・パターンは全く同じである（〈共通語訳〉を東京方言形として、下がり目

を表示した)。

- (6)
- |                          |                         |
|--------------------------|-------------------------|
| a. ウレ <sub>1</sub> ル     | 〈売れる〉                   |
| b. ウレ <sub>1</sub> タ     | 〈売れた〉                   |
| c. ウレ <sub>1</sub> ン     | 〈売れない〉                  |
| d. ウレンヤッ <sub>1</sub> タ  | 〈売れな <sub>1</sub> かった〉  |
| e. ウレンヤッ <sub>1</sub> タラ | 〈売れな <sub>1</sub> かったら〉 |
| f. ウレヨッ <sub>1</sub> タ   | 〈売れて <sub>1</sub> た〉    |
| g. ウレロ <sub>1</sub> ー    | 〈売れよ <sub>1</sub> う〉    |
- 
- (7)
- |                          |                         |
|--------------------------|-------------------------|
| a. ウレ <sub>1</sub> ル     | 〈熟れ <sub>1</sub> る〉     |
| b. ウレ <sub>1</sub> タ     | 〈熟 <sub>1</sub> れた〉     |
| c. ウレ <sub>1</sub> ン     | 〈熟れ <sub>1</sub> ない〉    |
| d. ウレンヤッ <sub>1</sub> タ  | 〈熟れ <sub>1</sub> なかった〉  |
| e. ウレンヤッ <sub>1</sub> タラ | 〈熟れ <sub>1</sub> なかったら〉 |
| f. ウレヨッ <sub>1</sub> タ   | 〈熟 <sub>1</sub> れてた〉    |
| g. ウレロ <sub>1</sub> ー    | 〈熟れよ <sub>1</sub> う〉    |

早田 (1985: 21) は、福岡方言のアクセント挿入規則の1つとして、下の(8)を仮定している。

- (8) アクセントが無く、かつ動詞句で終る音韻句は、句末第2モーラ目（無ければ第1モーラ目）を含む音節にアクセントが来る。

「動詞句」には、形容詞句も含まれる。タベ<sub>1</sub>タ、タベ<sub>1</sub>ル、タベロ<sub>1</sub>ー〈食べよう〉など、確かに句末第2モーラにアクセントが来る場合が大半ののだが、タベ<sub>1</sub>タラ、タベ<sub>1</sub>ルナ、など、若干句末第3モーラ目に来る語尾がある。早田 (1985) は、タラのラ、ルナのナなどを韻律外モーラとすることで（句末か

らモーラを数えるときに除外することで) 処理している<sup>3</sup>。本稿では、(8)の規則よりは不格好になるが、使える情報はすべて使って、韻律外モーラを仮定せずに一般化を試みる。

### 2.1.2. 音節・形態構造の詳細とアクセント

動詞活用形のアクセントを、音節構造や形態構造に注目して、下の(9)(10)でもっと詳細に見てみよう。(9)はure-〈売れ- ~ 熟れ-〉という母音語幹の場合、(10)はur-〈売r-〉という子音語幹の場合である。また、重音節の場合、例えばure-N<sub>1</sub>でなく ure<sub>1</sub>-Nのように、実際の下がり目に<sub>1</sub>を付してある。右側のカラムには、語末付近の音節構造と形態構造を示した。[ ]は音節境界を、μはモーラを表わす。

(9) a.	ure <sub>1</sub> -ru	〈うれる〉	[μ][μ] <sub>1</sub> -[μ]
b.	ure <sub>1</sub> -ta	〈うれた〉	[μ][μ] <sub>1</sub> -[μ]
c.	ure <sub>1</sub> -N	〈うれない〉	[μ][μ <sub>1</sub> -μ]
d.	ure <sub>1</sub> -re	〈うれるろ〉	[μ][μ] <sub>1</sub> -[μ]
e.	ure <sub>1</sub> -na	〈うれないと〉	[μ][μ] <sub>1</sub> -[μ]
f.	ure-sase <sub>1</sub> -ru	〈うれさせる〉	[μ][μ] <sub>1</sub> -[μ]
g.	ure-sase <sub>1</sub> -ta	〈うれさせた〉	[μ][μ] <sub>1</sub> -[μ]
h.	ure-N-yaQ <sub>1</sub> -ta	〈うれなかった〉	[μ][μ] <sub>1</sub> -[μ]
i.	ure-yo <sub>1</sub> o	〈うれよう〉	[μ]-[μ <sub>1</sub> μ]
j.	ure-te <sub>1</sub> N	〈うれてみて〉	[μ]-[μ <sub>1</sub> μ]
k.	ure-Nme <sub>1</sub> e	〈うれるまい〉	-μ[μ <sub>1</sub> μ]
l.	ure <sub>1</sub> -tara	〈うれたら〉	[μ] <sub>1</sub> -[μ][μ]
m.	ure-na <sub>1</sub> gara	〈うれながら〉	-[μ] <sub>1</sub> [μ][μ]
n.	ure-ya <sub>1</sub> Nna	〈うれてくれるな〉	-[μ <sub>1</sub> μ][μ]

(10) a.	ur <sup>1</sup> -u	〈売る〉	[μ][C <sup>1</sup> -V]
b.	uQ <sup>1</sup> -ta	〈売った〉	[μ][μ <sup>1</sup> ]-[μ]
c.	ur-a <sup>1</sup> N	〈売らない〉	[μ][C-V <sup>1</sup> ][μ]
d.	u <sup>1</sup> r-e	〈売れ〉	[μ] <sup>1</sup> [C-V]
e.	ur-a <sup>1</sup> na	〈売らないと〉	[μ][C-V <sup>1</sup> ][μ]
f.	ur-ase <sup>1</sup> -ru	〈売らせる〉	[μ][μ <sup>1</sup> ]-[μ]
g.	ur-ase <sup>1</sup> -ta	〈売らせた〉	[μ][μ <sup>1</sup> ]-[μ]
h.	ur-aN-yaQ <sup>1</sup> -ta	〈売らなかった〉	[μ][μ <sup>1</sup> ]-[μ]
i.	ur-o <sup>1</sup> o	〈売ろう〉	[μ][C-V <sup>1</sup> ][μ]
j.	uQ-te <sup>1</sup> N	〈売ってみて〉	[μ]-[μ <sup>1</sup> μ]
k.	ur-aNme <sup>1</sup> e	〈売るまい〉	[C-Vμ][μ <sup>1</sup> μ]
l.	uQ <sup>1</sup> -tara	〈売ったら〉	[μ] <sup>1</sup> -[μ][μ]
m.	ur-i-na <sup>1</sup> gara	〈売りながら〉	-[μ] <sup>1</sup> [μ][μ]
n.	ur-i-ya <sup>1</sup> Nna	〈売ってくれるな〉	-[μ <sup>1</sup> μ][μ]

(9)(10)から分かるように、下がり目は、後ろから3モーラ目より前にはない。下がり目は、後ろから2モーラ目または3モーラ目にある。2モーラ目になるか、3モーラ目になるかは、動詞語尾の音節構造によって、下の(11)のように予測が可能である。

(11) (i) (a)動詞語尾が1モーラなら、2モーラ目になる：

(9)(a)-(h)、(10)(a)(b)(d)-(h)<sup>4</sup>。

(b)動詞語尾の最後が重音節なら、2モーラ目になる：

(9)(c)(i)(j)(k)、(10)(c)(i)(j)(k)。

(ii) (a)動詞語尾が2モーラ2音節なら、3モーラ目になる：

(9)(l)、(10)(l)。

(b)動詞語尾が3モーラ3音節なら、3モーラ目になる：

(9)(m)、(10)(m)。



- (c)動詞語尾の、最後ではなく最後から2番目の音節が重音節なら、  
3モーラ目になる：(9)(n)、(10)(n)。

これは、下の(12)の規則として一般化が可能である。

- (12) 後ろから3モーラ目にアクセントを付与せよ<sup>5</sup>。

ただし、後ろから2モーラ目を含んで、それより後ろに形態素境界ないし重音節がある場合には、後ろから2モーラ目にアクセントを付与せよ<sup>6,7</sup>。

## 2.2. 形容詞のアクセント

形容詞も動詞と同様である。東京方言の「しろㇿい」と「あかい」のような違いが、福岡方言にはない。下の(13)(14)では「赤い」に代表させるが、あらゆる形容詞に、アクセントの区別がない。

- (13) a. アカㇿイ                                   〈赤い〉  
b. アカカㇿㇿタ                               〈赤かった〉  
c. アカカㇿㇿタラ                              〈赤かったら〉  
d. アカカラㇿナ (イカㇿン)                 〈赤くないと (いけない)〉  
e. アコㇿー<sup>8</sup> (ナㇿイ)                       〈赤く (ない)〉

- (14) a. akaㇿ-i  
b. aka-kaQㇿ-ta  
c. aka-kaQㇿ-tara  
d. aka-kar-aㇿ-na  
e. akoㇿ-o (← aka-u)

(14)におけるアクセント付与も、(12)の規則で説明可能である。なお、

アカカー〈赤いなあ！〉という下がり目のない形があるが、これについては注13を参照されたい。

### 3. 疑問詞疑問文のアクセント

#### 3.1. 下がり目がない場合とある場合

ここでは、疑問詞疑問文の文末の音調を決定するメカニズムを見る。冒頭の(2)で見たように、疑問詞疑問文では、下の(15)のように文末の音調が実現する。(15)の例文中で、( ) はアクセント句の境界を表わす。

- (15) a. それが主文であって、音形を持たないQ<sup>9</sup>があると仮定出来る場合は、下がり目のない上昇調：(ダレガ フコーカニ キタ) φ ↑  
b. それが主文であって、音形を持つQがあると仮定出来る場合は、下がり目がある：(ダレガ フコーカニ キタト<sub>1</sub>ヤラ)  
c. それが従属文（間接疑問文など）であって、音形を持つQがあると仮定出来る場合は、下がり目がある：  
(ダレガ フコーカニ キタ<sub>1</sub>カ) (ワカラ<sub>1</sub>ン)

(15)(a)のように、音形を持たないQがあると仮定出来る場合には、下がり目がないのに対し、(15)(b)(c)のように、音形を持つQ「ヤラ」や「カ」がある場合には、下がり目がある。そこで、下の(16)のように仮定しておく。(16)については、次節で改めて検討する。

- (16) 音形を持たないQがある場合には、アクセント付与はない。

#### 3.2. 下がり目がある場合の、その位置

次に、下がり目の位置を検討しよう。(15)(b)(c)は、主文（直接疑問文）か従属文（間接疑問文）かという違いはあるが、共に音形を持つQで終わっている。以下に、主文のQの例として「ヤラ」と「カイナ」、従属文のQの例とし

て「カ」「テモ」「トコロデ」を取り上げて、疑問詞疑問文末の音調を見てみよう。右側のカラムには、問題になる下がり目のあたり（二重下線部分）の音節構造を示した。#は単語境界、[ ]は音節境界、 $\mu$ はモーラを表わす。\*の付いた文は非文法的である。

- (17) a. (ドコニイクトト ラ # ヤラ) [  $\mu$  ]  $\uparrow$  # [  $\mu$  ] [  $\mu$  ]  
 <どこに行くのやら>  
 b. \*(ドコニイクト#ヤ $\uparrow$ ラ)  
 c. \*(ドコニイクト#ヤラ)
- (18) a. (ドコニイクト#カイ ナ) # [  $\mu$  ]  $\uparrow$  [  $\mu$  ] [  $\mu$  ]  
 <どこに行くのかな>  
 b. \*(ドコニイクト#カイ $\uparrow$ ナ)  
 c. \*(ドコニイクト#カイナ)  
 d. \*(ドコニイクト# $\uparrow$ カイナ)
- (19) a. (ドコニイクトト カ) (ワカラ $\uparrow$ ン) [  $\mu$  ]  $\uparrow$  # [  $\mu$  ]  
 <どこに行くのか、わからない>  
 b. \*(ドコニイクト#カ) (ワカラ $\uparrow$ ン)
- (20) a. (ドコニイッテ モ) (オンナジ $\uparrow$ クサ) [  $\mu$  ]  $\uparrow$  # [  $\mu$  ]  
 <どこに行っても、おんなじさ>  
 b. \*(ドコニイッテ モ) (オンナジ $\uparrow$ クサ)
- (21) a. (ドコニイッタ#トコロ デ) (オンナジ $\uparrow$ クサ) [  $\mu$  ] [  $\mu$  ] [  $\mu$  ]  $\uparrow$  # [  $\mu$  ]  
 <どこに行ったところで、おんなじさ>  
 b. \*(ドコニイッタ#トコロ デ) (オンナジ $\uparrow$ クサ)

いずれも、後ろから2モーラ目か3モーラ目に下がり目がある。そして、後ろから2モーラ目に下がり目がある場合は、そこに形態素境界がある。以上のデータから、アクセント付与に関して、ひとまず下の(22)のように一般化ができる。(16)を後半部分に取り込んだ。

(22) 疑問詞疑問文のアクセント（暫定版）：

音形を持つQがあったら、(12)の規則が適用されてアクセントが付与される。Qが音形を持たない場合には、(12)は適用されない（アクセントは付与されない）。

ここでは、疑問詞からQまでを1つのアクセント句にするという操作を別に仮定している（Kubo 2005、久保 2006など参照）。この操作が行なわれたあとで、1つになったアクセント句に、アクセントを付与する。このことについて、そもそも、アクセント付与としてよいのかどうかを、次節で確認しておく。

### 3.3. 疑問詞疑問文の下がり目はアクセント付与によるのか否か

つまり、下の(23)(a)(b)のどちらなのか、ここで改めて確認しておく。

- (23) a. 1つになるのは、(WH.....Q) という、Qを含めた連続であり、そこにアクセントが付与される。
- b. 1つになるのは、(WH.....) 1 Q という、Qの直前までの部分であり、Qのアクセントが下がり目として実現する。

(23)の2つの仮定は、下の(24)(25)のように、一部異なる予測をする。

(24) (23a)の仮定による下がり目

- a. WH ..... 1 カ  
b. WX ..... 1 ヤラ

c. WH .....カ↑イナ

(25) (23b)の仮定による下がり目

a. WH .....↑カ

b. WH .....↑ヤラ

c. WH .....↑カイナ

(24c)と(25c)の違いが関与的である。実際は(24c)の下がり目を実現する。つまり、(23a)の仮定が正しいことになる。下の(26)で、疑問詞がなく、「カイナ」の持つアクセントが下がり目として実現していると考えられる場合(a)と、疑問詞があって、「カイナ」を含むアクセント句が形成され、それにアクセントが付与されたと考えられる場合(b)を見よう<sup>10</sup>。

(26) a. サクラ↑カイナ                   〈桜かな〉

b. ドコノサクラカ↑イナ   〈どこの桜かな〉

以上見てきたように、音形を持つQ周辺の下がり目は、Qの持つアクセントが実現したもの、つまり (WH                   ) ↑ Q ではない。(12)のアクセント付与規則によって付与されたもの、つまり (                    ↑ Q) である。

### 3.4. なぜ Q が音形を持たない場合にアクセント付与がされないのか？

では(22)に戻って、なぜ、Qが音形を持たない場合、つまり (                    ) φ ↑ には、アクセントが付与されないのか？(22)の後半部分のように特別に規定するのではなく、他の装置(分析)から帰結すると仮定する。それがうまく行けば、疑問詞疑問文のアクセント(22)は、その装置(分析)と(12)の規則とに還元できることになる。装置(分析)として、下の(27)の3つが考えられよう。

(27) a. アクセントは付与されているが、音声的に実現していないだけであ

る。

- b. アクセントは付与されていない。φがそういう特性を持っている。
- c. アクセントは付与されていない。何らかの制約がある。

次節では、この3つをひとつずつ検討する。

#### 4. 議論

##### 4.1. 「アクセントは付与されているが、音声的に実現していないだけである」 のか

(27) (a) の分析を検討する。疑問詞を bind する φ が文末にあるとすると、(12)の規則が適用されて、( ) 1#φ といった、表面的には (φを除けば) 語末アクセントと同じ表示になっている、という分析である。語末アクセントと同じなので、助詞が後ろに来れば下がるのが予測される。文末助詞の「ネ」で見てみよう。下の(28)のように、下がり目がない場合とある場合がある (実際の音形を観察するため、抽象的なφや境界を表示しない)。

- (28) a. ダレガクルトネ↑      〈誰が来るんだい?〉
- b. ダレガクルト1ネ      〈同上〉

(28) (b) はやや詰問調であるが、下がり目がある。しかしこの下がり目が、疑問詞疑問文に付与されたものかどうかは、判別しがたい。助詞自体がアクセントを持ると考えられるので、疑問詞疑問文が終わったあとで、1ネの下がり目が実現しているとも考えられる。語末アクセントか平板アクセントかを、助詞を付けて判断することができない以上、(27a)の分析が妥当かどうかは、今のところ、判断できないことになる。

## 4.2. 「アクセントは付与されていない。φがそういう特性を持っている」のか

### 4.2.1. 類似現象としての「ト複合語形成」

(27) (b) の分析を検討する。まず、福岡方言における類似した現象として、「ト」による名詞化を見てみよう。下の(29)が示すように、「ト」は、動詞及び形容詞に付いて、それを名詞化する。名詞には付かない。また、「ト」が付くとアクセント付与がされない<sup>11</sup>。

- (29) a. (タベ<sub>1</sub>ン)                      〈食べない〉  
      b. (タベ<sub>1</sub>ント)                  〈食べないの〉  
      c. (タ<sub>1</sub>ローガ) (タベサセラレ<sub>1</sub>タ)  
      d. (タ<sub>1</sub>ローガ) (タベサセラレ<sub>1</sub>タト)

早田 (1985: 22) は、「ト」は形式名詞であって、独立した音韻句は成さない。また、「ト」が付いた形式は、名詞句であって動詞句ではないから、アクセント付与(上の規則(8)の適用)は起こらない、とする。確かに動詞の後ろに普通の名詞が来ると、動詞とは別の音韻句になる。下の(30)(a)と(b)の違いを見よう。

- (30) a. (タ<sub>1</sub>ローガ) (タベサセラレ<sub>1</sub>タト)  
      b. (タ<sub>1</sub>ローガ) (タベサセラレ<sub>1</sub>タ) (トキ)

しかし次の現象を見ると、アクセント付与が起こらないのは、「ト」自体がそういう指定(アクセント付与を拒む性質)を持っているからではないか、と考えられるのである。

若年層では、下の(31)のように、名詞にも「ト」が付く現象が観察される(助詞の「ト」ではない)。基底でアクセントが指定されていると考えられる名詞でも、「ト」が付くと下がり目がなくなる。久保は下の(31)(b)のような、名詞

に「ト」が付いた文は言わないが、無理に言おうとすると、やはり下がり目がなくなる。

- (31) a. (アノヒト) (センセー) ↑  
 b. (アノヒト) (センセート) ↑ 〈あの人先生なの?〉

(29)(30)(31)から、「ト」はアクセント消去型の (deaccenting) 形態素で、直前の隣接する要素のアクセントを消すのだと考えられる<sup>12</sup>。これは複合語形成と同じである。例えば、「-イロ〈色〉」や「-ビョー〈病〉」といった形態素と同じように、[+ 0アクセント]という素性を「ト」に指定しておけばよい。つまり「ト」は、[V \_\_\_ ]Nという下位範疇化の指定を持ち、且つ[+ 0アクセント]という指定を持つことになる。この「ト複合語形成」は、PFに働くものと考えられる。

#### 4.2.2. 「φ複合語形成」

ここで、音形を持たないQであるφも、同じように考えられないか、というのが、ここでの分析である。WH X \_\_\_ ] (ただしXはQ[+WH]を含まない) という下位範疇化の指定を持ち、且つ[+ 0アクセント]という指定を持つ。また、「φ複合語形成」と呼べる複合過程が存在すると仮定する。下の(32)に、3つの形態素の指定をまとめて示す。

- (32) いずれも[+ 0アクセント]という特性を持つ3つの形態素
- a. /byoo/                    ]N \_\_\_ ]N  
 b. /to/                        ]V \_\_\_ ]N  
 c. /φ/                        WH X \_\_\_ ] (ただし、XはQ[+WH]を含まない)

以上、「疑問詞+φ複合語形成」という分析の可能性を探った<sup>13</sup>。ここでは、



φに関する議論だけを行なったが、複合語形成という意味では、音形を持つ「カ」「モ」「ヤラ」「カイナ」「トコロデ」などの、[+WH]の素性を持つQは、すべて同じような複合語形成によって疑問詞と結び付くと考える。

また、久保（1990a: 174-176）では、下の(33)のようなデータを示した。

- (33) a. (コレ) (イクラ) ↑に対する答えとして  
(ナンジューマン) 〈何十万〉  
b. (ナンジューマン) ↑ 〈「何十万」？=問い返し〉  
b. (ナンジューマン) ↑ 〈何十万？〉

(33)の基底形（アクセント付与に関する）は、それぞれ(34)のようであると思われる。すなわち、Q が疑問詞と係り受け関係を結んでいるのは(34)(c)のみである。(34)(a)(b)では、(12)によってアクセントが付与されていると考えられる（これらは複合語であるが、複合語アクセントも、大半は(12)で説明できるものと考えている。4.4.2節も参照）。

- (34) a. ナンジューマン  
b. ナンジューマン↑  
c. ナンジューマンφ[+WH]↑

さらに、下の(35)(a)(b)のような「普通の」複合語形成と、(35)(c)のような、疑問詞が関わる複合語形成は、同じものであると見たい。ここで、[ ] は、「ラシー」など、headとなる要素がc-commandする領域を表わす。

- (35) a. [ (ナ1オヤガ) (ドヨ1ービ) (フコ1ーカニ) (キタ)ラシ1イ)  
b. [ (ナ1オヤガ) (ドヨ1ービ) (フコ1ーカニ) (キタ)ジョーホー)  
〈「直哉が土曜日に福岡に来た」(という)情報〉  
c. [ (ナ1オヤガ) (イツ フコーカニ キタッテ) ]φ

〈直哉がいつ福岡に来たって?〉

「ラシイ」や「ジョーホー」は、それがc-commandする領域とは関わりなく、直前の1つの要素と複合語を形成するだけである。一方 $\phi$ [+WH]は、それがc-commandする領域とは関わりなく、しかし、疑問詞から始めて、それより後ろを全て取り込んで、複合語を形成するのである。

Smith (to appear) は、Truckenbrodt (1995) で提唱された Wrap-XP に似た制約、Wrap C[+wh]を提唱している(下の(36)を参照)。久保の考え方もこれに近いが、久保は、複合語形成によって Wrap-C[+wh]がクリアされると見る<sup>14,15</sup>。

(36) Wrap C[+WH]: Every C[+WH] must be in the same PhP as some associated wh element

結局のところ、分析の可能性を示すに留まったが、(27b)の分析は、今後、深めていく価値があると思われる。

#### 4.3. 「アクセントは付与されていない。何らかの制約がある」のか

(27)(c)の分析を検討する。ここでは、アクセント付与を阻止するものとして、まず上昇調イントネーション、次に givenness について見る。

##### 4.3.1. 「上昇調イントネーションがアクセント付与を阻止する」のか

東京方言では、上昇調イントネーションとアクセントの関係が、つとに指摘されている。川上(1963)では、重音節終わりの動詞・形容詞活用形を中心に、上昇調が後続する場合に下がり目がなくなる現象が指摘されている。

福岡方言でも、久保(1992)で指摘したように、上昇調が後続する場合に下がり目がなくなることがある。下の(37)が示すように、上昇調があつて「重音節終わりの場合」には、アクセントが付与されなくてもよい。下の(38)が示

すように、上昇調があつて「軽音節終わりの場合」には、常にアクセントが付与される。一方、下の(39)が示すように、疑問詞疑問文（ゆが文末にある場合）では、最終音節の軽重に関わりなく、アクセントが付与されない。よつて、上昇調の存在だけでは、疑問詞疑問文にアクセントが付与されないことは、説明できないことになる。

(37) 重音節終わりの場合

- a. タベテ<sub>1</sub>ン                      〈食べてみて〉
- b. タベテ<sub>1</sub>ン↑                    〈「食べてみて」？ = 問い返し〉
- c. タベテン↑                      〈食べてみて〉

(38) 軽音節終わりの場合

- a. タベ<sub>1</sub>ル
- b. タベ<sub>1</sub>ル↑
- c. \*タベル↑

(39) 疑問詞疑問文

- a. ダレガタバエン↑              〈誰が食べない？〉
- b. ダレガタベル↑
- c. \*ダレガタベ<sub>1</sub>ル↑

4.3.2. 「givenness がアクセント付与を阻止する」のか

川上 (1963) の指摘した現象とも深く関わると思われるが、Hara and Kawahara (2008) は、「～くない」構文における下がり目の有無が、文法化されていると主張する。下の(40)(a)の「さむ<sub>1</sub>くない↑」は、人から聞いて寒いと知っている場合など、話者が間接的な証拠しか持っていない場合にも使えるが、(40)(b)の「さむくない↑」は、直接的な（自分が感じたという）証拠を持っていないと使えないと言う。

- (40) a. (カ↑ナダって) (さむ↓くない) ↑  
b. (カ↑ナダって) (さむくない) ↑

そして、下の(41)の一般化を行なっている。

- (41) The presupposition of *p-nai*? with Deaccentuation:  
p is already Given in the common ground. ... (Hara and Kawahara  
2008, p.511 (6))

Hara and Kawahara (2008) は、結論部分 (p.512) で次のようにも述べている。... when the predicate in the rising negative question is deaccented, the sentence presupposes that the positive proposition is already Given (p is a common belief). 確かに、下がり目の有無とgivennessは関係があるだろう。

福岡方言について、山部 (1991) は、下の(42)のような制約 (山部 (1991) では「規則」としている) を仮定すれば、早田 (1985) や久保 (1989) で提唱された、福岡方言の疑問詞疑問文のアクセント規則はいらないと主張する。

- (42) 談話のなかで確定した部分ではピッチの下がりめがあってはならない

確かに、疑問詞から後ろはすべて、談話のなかで確定した部分だと言えそうである。山部は、(42)が「確定した」との解釈が強られる要素ほどピッチの下がり目を持つのがより困難である」ことを予測すると言う。つまり、要素によって「確定した」との解釈が強られる程度は違い、下がり目を持てるかどうかの困難さも違う。疑問詞の後ろでも、下がり目は出て来れる、という。しかし、久保の方言では、山部 (1991) が? が1つ付く例として挙げた下の(43)は、非文である。

- (43) a. \*(イツ ヤ1マベガ) (キョート イッタトヤ) ↑  
 b. \*(イツ ヤマベガ キョ1ート) (イッタトヤ) ↑

山部 (1991) の方言と久保の方言は、疑問詞が関わる音調現象に関しては、異なる文法を持つと考えられる。久保の方言では、疑問詞とそれと係り受け関係を結ぶ助詞の間に、1つの音韻句を形成するという規則があり、それが疑問詞のスコープを表わしていると考えられる。山部 (1991) の方言には、そういった規則がないと考えられる。

ただ、山部 (1991) の挙げる、疑問詞の関わらない、下の(44)のような例は、久保でも?が1つ付く程度である(山部 (1991) では?は付いていない)。久保 (1992) にも、似た例として下の(45)を挙げた。疑問詞の関わらない場合の、下の(44)や(45)のような音調に関しては(「連結音調」とでも名付けようか)、山部 (1991) の方言と久保の方言で、類似したメカニズムが働いている可能性が高い<sup>16</sup>。

- (44) Aさん: (キョ1ネン) (キョ1ート) (イッタト1ガ) (オルゲナ)  
 Bさん: a. ? (オレガ キョネン キョート イッタッタ1イ)  
 b. ? (ヤ1マベガ) (キョネン キョート イッタッタ1イ)
- (45) a. ? (オレ1ガ) (キョ1ート) (イッ1テ) (ナンデワルイト) ↑  
 b. (オレ1ガ) (キョ1ート イッテ) (ナンデワルイト) ↑  
 c. (オレ1ガ) (キョート イッ1テ) (ナンデワルイト) ↑  
 d. (オレガ キョート イッ1テ) (ナンデワルイト) ↑

結局のところ、(27c)の分析は、山部 (1991) の方言に関して、支持される。

以上、(27)の3つの分析をひとつひとつ見てきたが、久保の内省データを観察する本稿としては、(27)(b)の分析の確からしさを高めて行くことが、今後の課題となろう。

#### 4.4. おわりに

##### 4.4.1. フォーカス・イントネーションと疑問詞疑問文の音調

情報構造に関連して述べておく。東京方言と同じように、フォーカス・イントネーションは、福岡方言にも存在する。いわゆるフォーカス・イントネーションは、フォーカスの部分で急激なピッチの上昇と下降があり、あとは、「高」が低めに押さえられる（福岡方言の疑問詞疑問文におけるように「アクセントの対立が中和する」、ということはない）。図式的に表わせれば、下の(46)(a)がフォーカス・イントネーション、(b)が疑問詞疑問文の音調である。

- (46) a. (フォーカス) ( 1 ) ( 1 ) ( 1 Q)  
 b. (WH Q)

上の(45)(a)の「オレガ」にフォーカスを置けば、下の(47)のように、前半部分にフォーカス・イントネーションが、後半部分に疑問詞疑問文の音調が現れる。

- (47) (オレガ) (キョート) (イッテ) (ナンデワルイト) ↑

フォーカス・イントネーションと疑問詞疑問文の音調の違いを、下の(48)(49)にまとめる。

- (48) フォーカス・イントネーション  
 a. フォーカス部分より後ろの下がり目が目立たない。  
 b. アクセント句は1つである必要はない。

- (49) 福岡方言の [WH Q] の音調  
 a. 疑問詞からQまで下がり目が無い。  
 b. アクセント句は1つでなければならない。

東京方言で、疑問詞のスコープとフォーカス・イントネーションのドメインが一致することは、Ishihara (2002) や Deguchi and Kitagawa (2002) で指摘されている。福岡方言には、フォーカス・イントネーションとは別に、疑問詞疑問文の音調が存在する。

#### 4.4.2. まとめ

ここで、本稿の目的であった、福岡方言における動詞・形容詞と疑問詞疑問文のアクセントについて、アクセント付与規則を下の(50)に再掲する。

(50)=(12) 後ろから3モーラ目にアクセントを付与せよ。

ただし、後ろから2モーラ目を含んで、それより後ろに形態素境界ないし重音節がある場合には、後ろから2モーラ目にアクセントを付与せよ。

(50)=(12)の一般化は、早田 (1985) の一般化(8)より不格好である。しかし、韻律外モーラを仮定しないという点では、アドホックな点が解消されている。また、疑問詞疑問文のデータも説明できるようになっている(4節で見たように、Q が音形を持たないφの場合が問題ではあるが)。本稿では、(50)=(12)の規則が扱う対象を、動詞・形容詞と疑問詞疑問文に限定したが、外来語や複合語、擬音語・擬態語、助詞<sup>17</sup>のアクセントまで含めた一般化が、可能だろうと思われる。ただしこれらの語彙においては、1.2節の末尾でも述べたように、個々の語彙項目ごとにアクセントを指定しておかねばならない場合が、かなりある。

朝鮮語釜山方言や晋州方言は、疑問詞疑問文において、福岡方言と非常に類似した現象を持つ。ただ、(WH ... Q) でQが音形を持っていても、φでも、最後の音節でピッチが下がる。上昇調イントネーションはない(久保 (1994)、Kubo (2005) を参照)。これらの方言でも、疑問詞疑問文の音調について、他のどの範疇といっしょに説明することが可能か、探る必要がある。

[付記] 本稿の研究の一部は、次の日本学術振興会科学研究費補助金を受けている。基盤研究 (A) 「プロソディーの構造と文法性、文理解に関する総合的研究」 (平成17~20年度、研究代表者: 窪菌晴夫、課題番号: 17202010)

## 注

- 1 窪菌 (2006: 26) に、「乳飲み子」を例示して、「これは、アクセントを複合語を形成する二要素の境界に置こうとした結果である。」とあることから、久保が上記 (3) に合わせて創作した。
- 2 Kubozono (2006: 1145, note 2) には、下の i の記述がある。
  - (i) ... Supposing that the foot is not constructed across a morpheme boundary, the penultimate pattern of accented verbs and adjectives and the antepenultimate pattern of nouns can both be attributed to a rule that assigns an accent on the rightmost non-final foot. ...  
外来語ではなく「名詞」としている点にも注目すべきであるが、ここでは、-3のパターンと-2のパターンの違いが一般化できる、としている点に注目しよう。具体的には、下の(ii)が提案されている (Kubozono (2006: 1151-1152))。
    - (ii) a. Accent the rightmost non-final foot (Nonfinality-foot, Edgemostness).
    - b. Within the rightmost, non-final foot, accent the syllable that is closer to the word-internal morpheme boundary (Align CA).
    - c. Keep the accent of the final member unless it is on the very final syllable (Max-accent, Nonfinality-syllable).ここで、間違いを恐れずに久保が例を作って示せば、下の(iii)や(iv)のようになると思われる。{ }はフット境界を示す。
    - iii a. {たべ}{な}が}ら
    - b. {たべ} }{れば}
    - c. {たべ} }-る
    - d. {たべ} }-ろ
    - iv a. ち-{のみ} }-ご
    - b. {くわ}{がた} }{むし}
    - c. の-{ね} }ず}み
- 3 早田 (1985) には記述がないが、下の(9)(10)にある -teN、-nagara については、おそらく-te(N)、-naga(ra) とするであろう (括弧内が韻律外モーラ)。形容詞では、aka-u → a } koo の -u が該当する。



4 (10)(e) ur-a 1 na の -ana は 2 モーラ語尾であるが、後ろから 2 モーラ目が語幹と語尾に跨っているので、ここでは仮に 1 モーラ語尾として扱っておく。

5 3 モーラ目なのか、3 モーラ目を含む音節なのかは、ここでは関係がない。また、所謂「ラテン語規則」にしても、変わりがない。

6 形態素境界と下がり目が一致しないのは、重音節にアクセントが来る場合と、(10)(a) [u 1][r-u], (10)(c) [u][r-a 1][N], (10)(d) [u 1][r-e], (10)(e) [u][r-a 1][na] といった例である。[ ] はモーラ境界を表わす。

7 若干、説明できないデータがある。下の(i)を見よう。(i)(b)は \*ur-u 1 naが期待されるが、非文法的である。

- (i) a. ure 1 -runa           〈うれるな〉           [μ] 1 -[μ][μ]  
       b. u 1 r-una           〈売るな〉           [μ] 1 [C-V][μ]

これらは、注 2 で見た Kubozono (2006) の (ii)(a)(b) を使えば、{ure 1}-runa、{u 1}r-una といった表示にアクセントが付与されて、{ure 1}-runa {u 1}r-una となると分析できるだろう。(9)(10)にあるデータも、次のように分析できなくはない(ただし、形態素境界よりモーラ境界を尊重する。これは、Selkirk (1984: 26) の Strict Layer Hypothesis から自然に帰結する。すなわち、韻律単位としてフットとモーラは別なので、[[u][r]-a][N] といった表示はあり得ない)。

(ii) a. Kubozono (2006) の(ii)(a)(b) を使えば説明できるもの：

{ure 1}-ru, {ure 1}{tara}, {ure}{na 1 ga}ra, {uQ 1}-ta, {ur-a 1}na または u{r-a 1}na

b. 重音節にアクセントを付与する規則を仮定すれば説明できるもの：

{ure}-{yo 1 o}, u{r-a 1}N

c. Non-finality を仮定すれば説明できるもの：{u 1}-ru

8 ア 1 コーという音調も聞かれるが、久保は言わない。早田 (1985: 94) では、明治生まれの方(おふたり)はア 1 コーのみ、大正生まれの方(おひとり)はア コー という形も持つ。

9 疑問詞を bind する [+WH] の補文化辞を Q とする。

10 「カ」など 1 モーラの助詞でも、モーラ音素終わりの単語に続いた場合、下の(i)の(a)と(b)のような違いが出る。(a)では、(WH...Q)に付与されたアクセントが下がり目として実現していると考えられる。

(i) a. イツノパン 1 カ vs. ?イツノパ 1 ンカ   (「\_\_\_\_\_ワカラ 1 ン」という環境で)

b. \*パン 1 カ vs. パ 1 ンカ                   (「\_\_\_\_\_ゴ 1 ハンカ」という環境で)

11 名詞化の「ト」とは別の、条件を表わす「ト」や並列の「ト」の場合は(両者を区別する必要はないかもしれないが)、アクセントが付与される。

(i) a. (タベ 1 ト) (イカ 1 ン)           〈食べないといけない〉

b. (コレ 1 ト) (アレ)               〈これとあれ〉

12 (31)は久保の話す言語のデータとは言えないが、例え「無理に」ではあっても、「ト」を付けると下がり目が無くなるというのは、データとして扱っていいのではないと思われる。

13 「ト」や「φ」とやや似た性質を示すものに、形容詞語尾「カー」がある。これは「詠嘆」の意味を持つ。発話時の直接体験を表わす。大阪方言の「さむー」などの、形容詞語幹を延ばすものに近いだろう。

- (i) a. サムカー (上昇調ではない平板) 〈寒いなあ〉  
 b. \*サムカ<sub>1</sub>ー  
 c. サム<sub>1</sub>カ 〈寒い〉 (久保はあまり使わない)  
 d. サム<sub>1</sub>イ

「カー」が付くと、下がり目が無くなる。「カー」に限らず、「ハラヘッター」など、「詠嘆」では、下がり目のない発話が普通である。これらと「ト」「φ」が共通に持つモダリティを考えることもできるかもしれない。また、下の(ii)(b)のような「カ」の音調も、同じように考えることができるかもしれない。

- (ii) a. (ナンイーヨートヤ) ↑ (キサ<sub>1</sub>ン) 〈何言ってるんだ、貴様!〉  
 b. (ナンイーヨートカ) ↑ (キサ<sub>1</sub>ン) 〈同上〉  
 c. \* (ナンイーヨート<sub>1</sub>カ) (↑) (キサ<sub>1</sub>ン) 〈同上〉

14 Wrap-XP は、次の i のような制約である。

- (i) Wrap-XP: Each lexically headed XP must be contained inside a phonological phrase.

15 Kuroda (2005) が扱っている下の i のような現象も、福岡方言の疑問詞疑問文と (一部) 同じように扱えるかもしれない。i には、(だれが書いた) (ほ<sub>1</sub>んも) や、(だれが) (書<sub>1</sub>いた) (ほ<sub>1</sub>んも) といったバリエーションもある。福岡方言では、下の ii のようになる。バリエーションはない。「モ」も「カ」と同じQである。

- (i) (は<sub>1</sub>なこは) (だれが書いたほんも) (読ま<sub>1</sub>なかった)  
 (ii) (は<sub>1</sub>なこは) (だれが書いたほん<sub>1</sub>も) (読まんやっ<sub>1</sub>た)

16 例えば下の i の「ミ<sub>1</sub>タ」は「確定した」部分だと思われるが、下がり目は消えない。(42)ではこれが説明できないように思われる。(42)に他の制約を加えることで、記述が可能になるかもしれない。

- (i) 問: (ダレ ミ<sub>1</sub>タ) ↑  
 答: (ナオミ ミ<sub>1</sub>タ) vs. \* (ナオミ ミ<sub>1</sub>タ)

17 早田 (1985: 21) では、無アクセント助詞や無アクセント繫辞に前アクセントを挿入する規則を仮定している。基本的には、(12)でうまくいく: <sub>1</sub>ヤ、<sub>1</sub>ガ、<sub>1</sub>バ (を)、<sub>1</sub>ニ、<sub>1</sub>バイ、<sub>1</sub>タイ、<sub>1</sub>カラ、グ<sub>1</sub>ライ〜ク<sub>1</sub>ライ、<sub>1</sub>yar- (繫辞) など。個別に指定しておく必要のあるものもある: バッカ<sub>1</sub>シ〜バッカ<sub>1</sub>リ、マ<sub>1</sub>デ、など。

## 参考文献

- Deguchi, Masanori, and Yoshihisa Kitagawa (2002) Prosody and WH-questions. In Masako Hirotsu ed., *Proceedings of the Thirty-second Annual Meeting of the North Eastern Linguistic Society*. pp.73-92. Amherst, Mass: GLSA Publications.
- Hara, Yurie, and Shigeto Kawahara (2008) Deaccenting, Maximize Presupposition and Evidential Scale. In P. A. Barbosa, S. Madureira, and C. Reis, eds., *Proceedings of the Speech Prosody 2008 Conference*. pp. 509-512. Campinas, Brazil: Editora RG/CNPq.
- 早田輝洋 (1985) 『博多方言のアクセント・形態論』福岡：九州大学出版会。
- Ishihara, Shinichiro (2002) Invisible but Audible Scope Marking: WH-Constructions and Deaccenting in Japanese. In Line Mikkelsen and Chris Potts, eds., *WCCFL 21 Proceedings*. pp.180-193. Somerville, MA: Cascadilla Press.
- 川上 葵 (1963) 「文末などの上昇調について」『国語研究』16: 25-46。川上葵 (1995) 『日本語アクセント論集』(東京：汲古書院) pp.274-298 に再録。
- 久保智之 (1989) 「福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』156: 左 1-12。
- (1990a) 「福岡市方言の問い返し疑問詞疑問文 (WH-echo) のピッチパターン」『文学研究』(九州大学文学部) 87: 左153-179。
- (1990b) 「福岡市方言の疑問詞表現のアクセント規則」『九大言語学研究室報告』11: 103-118。
- (1992) 「福岡市方言におけるアクセント消去について」国広哲弥編『日本語イントネーションの実態と分析』(文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」(研究代表者・杉藤美代子)、C3班「日本語音声の韻律的特徴に関する言語学的理論の研究」平成3年度研究成果報告書) pp.265-276。
- (1994) 「疑問詞のスコープを表わす高く平らなピッチ—朝鮮語釜山方言・晋州方言についての報告—」『アジア・アフリカ文法研究』22: 93-108。
- (2001) 「福岡方言における統語論と音韻論の境界領域」『音声研究』5-3: 27-32。
- (2002) 「音韻句、シンタックス、フォーカス」日本言語学会 第125回大会 シンポジウム「音韻領域」での発表論文 (11月3日、東北学院大学)。『日本言語学会第125回大会予稿集』pp.15-20。日本言語学会。
- Kubo, Tomoyuki (2005) Syntax-phonology interfaces in Busan Korean and Fukuoka Japanese. In Shigeki Kaji ed., *Proceedings of 4<sup>th</sup> International Symposium. Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Tone-syntax Interface, and Descriptive Studies*. pp.195-209. Tokyo: Institute of Languages and Cultures of

Asia and Africa.

- 久保智之 (2006) 「福岡方言と朝鮮語釜山方言の疑問詞疑問文の音調」。筑紫国語学談話会編『筑紫語学論叢Ⅱ—日本語史と方言—』左20-36。東京：風間書房。
- 窪蘭晴夫 (2006) 『アクセントの法則 (岩波科学ライブラリー118)』東京：岩波書店。
- Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from? A case study of Japanese loanword accent. *Lingua (A special issue on loanword phonology)*. 116: 1140-1170.
- Kuroda, S.-Y. (2005) Prosody and the Syntax of Indeterminates. In Dorian Roehr, Ock-Hwan Kim, and Yoshihisa Kitagawa, eds., *Syntax and Beyond (Indiana University Working Papers in Linguistics, vol.5)*. pp.83-116. Bloomington, Indiana: Indiana University Linguistics Club.
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of the Grammar of Japanese*. Den Haag: Mouton.
- Selkirk, Elisabeth O. (1984) *Phonology and syntax: The relation between sound and structure*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Smith, Jennifer L. (to appear) [+wh] complementizers drive phonological phrasing in Fukuoka Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory*.
- Truckenbrodt, Hubert (1995) *Phonological phrases: Their relation to syntax, focus, and prominence*. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- 山部順治 (1991) 「福岡市方言の疑問詞疑問文のアクセント規則」未発表原稿 (8 ページ)。東京：東京大学。